

無調整クラウンへの挑戦

東京都技工士会
榎原デンタルラボ
榎原功二

咬合の再構築を行うとき咀嚼器官の役割とは何か、生体に調和した補綴物とは何かを考え、下顎運動に調和した再構成が重要となります。その基礎となる順次誘導咬合は 1987 年にウィーン大学のスラビチェック教授が提唱したもので、この理論はヒトの乳歯の萌出から永久歯列完成にいたる成長発育過程を、顎頭蓋の発達とリンクさせた生理的咬合理論であり、咬合構築のための上下顎関係はアングル I 級咬合の獲得を目指します、これは上下顎大臼歯における 1 歯対 2 歯の関係であり、この咬頭嵌合位の維持安定のための咬合の Key となる大臼歯のオクルーザル・コンタクトポイントの確立について考察したいと思います。また咬合様式としての犬歯誘導咬合とは、強いクレンチングの時臼歯が前歯を保護し、また強いグライディングを行ったとき前歯が臼歯を保護するという咬合の基礎であるミューチュアリープロテクション（相互保護）を構築するということであり、歯科技工士は天然歯のもつ咬合面展開角の後方歯から前方歯へと急峻となっている、歯の順次性を出来るだけ再現するということが重要となります。

今回はこれら、咬合の概念を小補綴装置制作に取り入れ、口腔内における咬合調整を少なくすることが出来るのか、咬合器への模型の付着、また咬合器の調整法を考えていきたいと思えます。